

毎年7月から旬を迎える、男鹿市若美地区の特産「わかみメロン」。JA秋田なまはげメロン部会の部会長として産地を牽引する蓬田富美雄さんは、40アールで青肉メロン「秋田美人」や赤肉の「レノンレッド」などを手掛けている。高校を卒業してすぐに、山形県庄内地方でプリンスメロンの栽培技術について研修。その後就農し、以来「わかみメロン」の栽培に汗を流している。今年も収穫期を迎えた蓬田さんに、高品質なメロンの栽培に励む姿勢を尋ねた。

圃場や品種の特性をふまえて栽培

蓬田さんのメロンの圃場は、日本海のすぐ近くにある砂地。寒暖差や水はけのよさがメロンの栽培に適している一方で、風が強く、過去には強風でハウスが飛ばされた苦い経験もある。ハウスの補強などもしながら「風をはじめ、天気はいつも気にしています」と、常に注意している。

「わかみメロン」は、1株から4果以内を仕上げるのが基本で、2本のつるにそれぞれ2果ずつを残して摘果する。蓬田さんの場合は、株から伸びた最初の2本のみを仕立てて、他のつるは伸長させないようにする。早い段階でつるの本数を制限することで、その後のつるの管理の負担が軽減されるうえ、樹勢が維持されてメロンが肥大しやすいという。

蓬田さんが育てる「秋田美人」は、全てBG-27という改良品種。BG-27は、根元から遠く節位が長いところに着果すると縦長に伸び、根元から近く節位が短い箇所を着果すると横に肥大する性質がある。高品質のメロンを収穫するため、「ちょうどいいところに着果するように」と品種特性を考慮しながら作業する。

開花期までの管理やかん水に注意

育苗作業を自ら行っており、今年は3月14日に播種をした。自分で手をかけることで、生育を確認しながら長くなりすぎず丈夫な苗を育てる。4月9〜10日に定植し、5月10日頃に開花。花芽のつき具合がメロンの収量に関わってくるため「苗を植えてから花が咲くまでの管理にとっても気を遣っています」という。

大きくかつ糖度のあるメロンを生産するためには、水管理が重要だ。蓬田さんは全ての圃場でベトコンハウスを設置し、かん水チューブを通して栽培している。今年は玉の肥大期に雨が少なかったが、チューブから都度かん水することで、降雨量の影響を受けずにメロンを大きく仕上げることができた。メロンが熟してきてから水を多く含むとメロンが割れてしまうため、収穫期に入った現在は、葉が萎れない程度のかん水を心掛けていく。

今年もおいしいメロンができました

7月3日から出荷を開始した蓬田さん。「砂地で栽培したメロンはおいしいと言われます。一方で、水分が多いため、棚もちが比較的短いという声もあります。日中に収穫するとメロンが柔らかくなってしまうため、棚もちがよくなるように、早朝に収穫しています」と話す。

今年のメロンはよく肥大し、表面のネット（網目）の張りもきれいに仕上がった。お中元などの贈答用需要が高いほか、家庭消費向けに県内を中心に出荷されている「わかみメロン」。「今年もおいしくできあがったので、ぜひ味わってください」と蓬田さんは笑った。

蓬田さんは、常に高いレベルの品質や単収を目指して、「わかみメロン」の栽培に取り組んでいます。日々の圃場管理はもちろん、計画的に防除や対策にも努め、高品質栽培への意識が高い生産者であり、メロン部会長として模範的な姿がうかがえます。



男鹿地区営農センター
佐藤 圭太

